せたがやアーツプレス

SETAGAYA ARTS PRESS

世田谷パブリックシアター
現代能楽集Ⅸ『竹取』
小野寺修二　小林聡美　貫地谷しほり

『The Silver Tassie　銀杯』

世田谷美術館
向井潤吉 人物交流記

世田谷文学館
筒井康隆展

生活工房
人はあそぶ
―メキシコ民芸玩具展

音楽事業部
Let's Sing ゴスペル!

2018.8-12
Vol.14

公益財団法人 せたがや文化財団

Cover Story カバーストーリー

現代能楽集Ⅸ『竹取』
TAKE TORI

世田谷パブリックシアター芸術監督・野村萬斎が掲げる「古典芸能と現代演劇の融合」を果たすべく、様々なアーティストが取り組んできたシリーズ「現代能楽集」。第9弾では振付家、演出家の小野寺修二が日本最古の物語文学と言われる「竹取物語」に挑みます。語るほどに膨らむ構想と、参戦する二女優の期待。新作誕生前夜のわくわくをお裾分けします。

「シリーズにお声がけいただいたのは、僕の創作が物語だけに依拠せずフィジカルに重きを置く、ある種の“スタイル”を持ったものだと、萬斎さんが認めて下さったからだと思うんです。これまでは自分の表現が固まることがいやで、どこか“スタイル”と呼ばれることを敬遠していたところもあるのですが、最近年を取ったせいか（笑）、古典の“型”やアングラと呼ばれる演劇の在りようにも連なる“スタイル”を持つことに、また別の可能性を感じられるようになっていて。だから今回、良いタイミングでチャレンジができる、と思っています」

企画の初動を、小野寺はこう語り出した。「竹取物語」を選んだのは「既に能や狂言として確立したものを現代に移すより、作者不詳で日本最古とも言われる物語文学と格闘するほうが面白く思えたから」とのこと。「それに、かぐや姫と言えば誰もがなんとなく物語の概要を知っているし、竹や月という、作品のカギになるものにも色々興味深いエピソードがあるんです。男と女、幸と不幸という二項対立の問題もいくつか絡むドラマだし、何より見つかった時は3センチくらいだった姫が、3ヶ月で普通の大人くらいになるという驚きの展開なのに、“それはさておき”と話を進めていくところ。この“不条理を受け取る力”はスゴいと思うし、実は日常はこの繰り返しだとも思えてくる。ひもとくほどに僕が、普段から気がかりに思うキーワードが物語の中に見えてきて、切り口もどんどん増えてくる。これは良い出会いだったと改めて思っているんです」と、題材へのアツい想い入れを口にする。

◆

飛躍の大きなクリエイションのために集められたキャストも多彩で、女優の小林聡美と貫地谷しほりを筆頭に、大駱駝艦の舞踏手・小田直哉、能楽師で宝生流 シテ方の佐野登らに加え、打楽器奏者による生演奏もあるという。

2016年の舞台『あの大鴉、さえも』で小野寺演出は経験済みの小林は「『あの大鴉～』は自分でも初めて体験するタイプの創作で、最後まで確信の持てないことが多かったのですが、再びお声がけいただけたことで“悪くはなかったのかな”と少し安心できました。小野寺さんの現場では、いかに一緒に面白がって楽しめるかが大事。鷹揚な性格の人が向いていると思うので、そこが私の存在理由かも知れません」と笑う。「『竹取』」は子どもと大人、読む年齢で受け取るものが変わった」とも言い「大人になって読み直した時、スペイシーな世界観がより広がったように感じられて。姫についても、書かれていることにつかみどころがないんです。小野寺さんの演出では、“誰が何役”と固定されるとは限りませんし、今回もどこまで遠くへつれて行って下さるのか、とても楽しみにしています」と期待を募らせた。

小野寺が、舞台での立ち姿と声に魅かれて出演を望んだ貫地谷は「オファーをいただいた後、身近な舞台関係の方何人かに相談したところ、“絶対やるべき！”“面白そうだよ”と皆さん背中を押して下さり、これはやるしかないと思いました。映像のお仕事が続くと、フレームで切られた演技というか、クセがついてしまう感覚があって。リセットするためにも、また自分を発見し直す機会としても年一回は舞台に立ちたいと思っているので、嬉しいお誘いでした」と声を弾ませる。

「踊りはおろか、私、身体がカタいので稽古についていけるかがちょっと不安なんです。でも小野寺さんは“できないことは要求しない”と伺っているので、そこにすがろうか、と（笑）。子ども時代、お姫様モノとして憧れた“かぐや姫”とは違う、複雑な内面を持つ女性としてのキャラクターに、創作過程で向き合えることが今から楽しみです」という笑顔は、稽古場のムードメーカー決定と思わせる明るさを放っていた。

「キャストもスタッフも“盛り込み過ぎたか？”と思う反面、これ以上ないと思えるベストな方たちに集まっていただけました。あとは僕が、頭の中にあることを出していくだけ。充実した現場になることはわかっているので、何をどこまで試み続けるか、このメンバーでしかできないことは何かをしっかり見極めたい。そんなことを今、考えています」と小野寺。一作ごとに挑み、自身を進化させてきた彼だが、次は何を見せてくれるのか。新たな一面が見える舞台を心待ちにしたい。

［構成・聞き手：尾上そら］［撮影：久家靖秀］

Profile

小野寺修二　おのでら・しゅうじ

日本マイム研究所にてマイムを学ぶ。1995年～2006年、パフォーマンスシアター水と油にて活動。06年、文化庁新進芸術家海外留学制度研修員として渡仏。帰国後、カンパニーデラシネラを設立。マイムの動きをベースとした独自の演出は、親しみやすさとアーティスティックなムーブメントを併せ持ち、幅広い世代から注目されるとともに、ミュージシャンやデザイナーなど異なるジャンルのアーティストからも熱く支持されている。第18回読売演劇大賞最優秀スタッフ賞受賞。主な演出作品に、『異邦人』（13年/世田谷パブリックシアター）、『カラマーゾフの兄弟』（12年/新国立劇場）、『変身』（17年/静岡県舞台芸術センター）、『あの大鴉、さえも』『ロミオとジュリエット』（16年/東京芸術劇場）など。「瀬戸内国際芸術祭2013」では、野外劇『人魚姫』を発表するなど、活動の場は劇場内にとどまらない。また、ケラリーノ・サンドロヴィッチ演出『キネマと恋人』、白井晃演出『ペール・ギュント』など、舞台作品の振付やステージングも手掛ける。2015年度文化庁文化交流使。

小林聡美　こばやし・さとみ

1982年、映画『転校生』で初主演。主な出演作に、ドラマ『やっぱり猫が好き』『すいか』『2クール』『コートダジュールN°10』、映画『かもめ食堂』『めがね』『プール』『紙の月』『海よりもまだ深く』など多数。著書も多く、『ワタシは最高にツイている』『読まされ図書室』『ていだん』などエッセイストとしても活躍。主な舞台出演に、『オイル』（野田秀樹演出）、『ハーパー・リーガン』（長塚圭史演出）、『24番地の桜の園』（串田和美演出）など。小野寺修二演出作品へは『あの大鴉、さえも』に続いて2作目。

貫地谷しほり　かんじや・しほり

2004年の映画『スウィングガールズ』で注目を集め、07年NHK連続テレビ小説『ちりとてちん』で初主演。08年第32回エランドール賞新人賞受賞。13年主演映画『くちづけ』で第56回ブルーリボン賞主演女優賞受賞。主な作品に、映画『白ゆき姫殺人事件』『バンクーバーの朝日』『悼む人』『望郷』、ドラマ『女くどき飯』『おみやさんSP』『おんな城主 直虎』『リピート～運命を変える10か月～』『ミス・シャーロック』、ナレーション『プロフェッショナル 仕事の流儀』『アーシストcafé 緑のコトノハ』、舞台『ガラスの仮面』（G2演出）、『もとの黙阿弥』（栗山民也演出）、『ハムレット』（ジョン・ケアード演出）など。

シアタートラム

現代能楽集Ⅸ『竹取』
10月5日［金］～17日［水］

構成・演出 小野寺修二　脚本 平田俊子　音楽 阿部海太郎
出演 小林聡美　貫地谷しほり
小田直哉（大駱駝艦）　崎山莉奈　藤田桃子　古川玄一郎（打楽器奏者）　佐野 登（能楽師 宝生流シテ方）
企画・監修 野村萬斎

一般 6,000円　プレビュー 5,000円（10月5日のみ）
せたがや 5,800円　友 5,500円　U24 高校生以下 3,000円
※プレビュー公演での各種割引なし　※未就学児入場不可

10月	5 金	6 土	7 日	8 月・祝	9 火	10 水	11 木	12 金	13 土	14 日	15 月	16 火	17 水
15:00		休	●	●		●	休		●	●		●	●
19:30	●※	演			★	●	演	●	●		★	●	

※10/5［金］：プレビュー公演
★＝ポストトーク あり

お問合せ：劇場チケットセンター　03-5432-1515

小林聡美　貫地谷しほり　小田直哉　崎山莉奈　藤田桃子　古川玄一郎　佐野 登

せたがや アーツカード会員（前売のみ）　友 世田谷パブリックシアター友の会会員（前売のみ）　U24 18歳から24歳対象（要事前登録・前売のみ）　高校生以下（要年齢確認）

車いすスペース有り（定員有り、前日19時までに要予約 03-5432-1515）　託児有り（定員有り 2,000円、3日前の正午までに要予約 03-5432-1526）

『The Silver Tassie 銀杯』

『管理人』で現代都市の底辺であがく男たちのかくも滑稽で、かくも哀しい現実を、シアタートラムという密な空間でリアルにあぶり出した森新太郎が、今度はスケール感たっぷりの骨太な反戦劇『The Silver Tassie 銀杯』を世田谷パブリックシアターで演出する。出演者22人の先頭に立つのは、悲劇のフットボール選手を演じる中山優馬。11月の公演に向けて意気込む森と中山からコメントが届いた。

銀杯（優勝カップ）を抱え、輝かしい将来を嘱望されたひとりのフットボール選手ハリー・ヒーガンを軸に、青春期特有の恋愛ドラマを織り込みながら、そのハリーが戦地へと向かい、国家の大義名分ともいうべき「戦争」の犠牲になっていく……。1929年初演の『The Silver Tassie 銀杯』は、アイルランドの劇作家ショーン・オケイシー（1880〜1964）の手で書かれたが、その初演はダブリンのアベイ劇場での上演を拒否され、作者自身は故国を愛しつつも仕事の場を求めてイギリスに永住を決意、ロンドンで初日の幕をあけたという因縁の作品。

世田谷パブリックシアターでの日本初演に向けて、森新太郎は、「第一次大戦中、約20万人のアイルランド人がイギリス兵として戦場に向かった。それは、イギリス帝国内でアイルランドが対等の立場を得るための、積極的な戦争協力であった。すぐにイギリス側が勝利するという楽観的な憶測は外れ、戦争は長期化、地獄のような塹壕戦を兵士たちは味わうことになる。そして大戦の終結から10年後、ショーン・オケイシーはこの戯曲を書いた。一種の反戦劇である」と位置づける。

ショーン・オケイシーは、ダブリンのスラム街に生まれ、アイルランド独立のために戦うようになり、劇作家になったのはかなり遅く、1923年、40代で書いた『狙撃兵の影』がデビュー作。以後の作品も素朴な人間の喜びと悲しみを、豊かな笑いと涙で描き出す、アイルランド演劇を代表するひとりだ。

『銀杯』が書かれた数年前から、ダブリンの下層民たちを描いた悲喜劇 “ダブリン三部作”によって、彼の名はすでに世に知られていたが、それらは常に物議を醸していた。彼は笑いをふんだんにまぶしながらも、市井の人々のありのままを描写した。そこに描かれたダブリン市民の欺瞞・不寛容・残酷さは、当時の愛国者たちにとって受け入れがたいものだった。その為、時に上演は妨害され、暴動にまで発展したと言う。『The Silver Tassie 銀杯』に至っては、劇場側が上演自体を拒絶したため、初演はロンドンで行われた。「本作品では、ダブリンにおけるありふれた日常と、戦場における極限状態とが対比的に描かれる。そのどちらにも等しく“暴力”が存在するということを、オケイシーは人々に訴えたかった」と森は分析する。

森新太郎「俳優・中山優馬が必要です」
中山優馬「一生懸命頑張ります」

ハリー・ヒーガンを演じる中山優馬には、「作者のショーン・オケイシーは反骨の社会派として知られ、当時、彼の作品は常に物議を醸していました。実際、ここまで奇妙かつパワフルな反戦悲喜劇を私は知りません。今回、この大作に中山くんと挑めることを、本当に嬉しく思います。戦争によって、夢ある人生を奪われてしまう主人公のハリー。『命ある限り望みはある』という慰めの言葉すら彼には呪わしい……。非常な覚悟を要する役です。今も昔も、世界中にハリーはいます。断言できますが、この舞台には俳優・中山優馬が必要です。一緒に頑張りましょう!」と、森はエールを送る。

劇中で歌や楽器演奏も披露する中山は、この言葉を受け、こうコメント。

森新太郎

中山優馬

「今回、シルバー・タッシーに出演出来る事大変有難く思います。森さんが演出をなされた舞台を拝見させて頂いた時に、背筋が伸びる思いというか、神経を研ぎ澄ませて、全力で挑まないと自分には務まらないなと思いました。きっと稽古の段階から濃厚で密な時間を過ごせると思います。どの様に仕上がったのか、是非劇場で確かめて下さい。一生懸命頑張ります」

歌あり、笑いあり、涙ありの賑やかな“反戦悲喜劇”が、この混迷の時代の日本にどう響くのか。いまから興味は尽きない。

「ロンドンの初演から90年、おそらく今回が日本での初演となる。彼の鳴らした警鐘は、現在の我々にどう響くであろうか。他に類を見ない、この奇妙かつパワフルな反戦悲喜劇を、どうか劇場で目撃していただきたい」（森）

Profile

森新太郎　もり・しんたろう

演劇集団円に所属。自身が主宰するモナカ興業でも活躍中。2009年、毎日芸術賞演劇部門・第11回千田是也賞、第64回文化庁芸術祭優秀賞受賞。14年、『汚れた手』『エドワード二世』などの演出で第21回読売演劇大賞最優秀演出家賞、および第64回芸術選奨新人賞受賞。世田谷パブリックシアター主催公演では、08年『日本語を読む〜リーディング形式による上演〜「城塞」』、09年『ドラマリーディング31「世界が緑色だったとき」（シェフのお話）』、11年東北大震災復興支援のリーディング公演『いのちを詠う』、12年『ハーベスト』、14年『THE BIG FELLAH ビッグ・フェラー』、17年『管理人』を演出。本年2月より8月中旬まで、文化庁新進芸術家海外留学制度でシンガポールに滞在。

中山優馬　なかやま・ゆうま

1994年、大阪府出身。2008年4月、NHK連続テレビドラマ『バッテリー』でドラマ初出演にして初主演を務める。12年に、初のソロシングルをリリース。15年に、初のソロコンサートを開催。TVドラマは、09年『恋して悪魔〜ヴァンパイア☆ボーイ〜』、12年『Piece』、17年『北斗―ある殺人者の回心―』の主演。映画は、16年『ホーンテッド・キャンパス』（松竹）の主演、今年3月の『雲天に笑う』など。舞台は15年『ドリアン・グレイの肖像』（作：オスカー・ワイルド 脚本：G2 演出：グレン・ウォルフォード）で舞台初主演。16年『それいゆ』（演出：木村淳）、「A NEW MUSICAL『クロスハート』」（演出：玉野和記）主演。17年「ABKAI2017『〜石川五右衛門 外伝〜』」、ミュージカル『にんじん』（演出：栗山民也）、18年「ミュージカル『Endless SHOCK』」（作・構成・演出：ジャニー喜多川）等に出演しキャリアを重ねている。世田谷パブリックシアターへの出演は本作が初めてとなる。

“音楽”を手がける国広和毅

『岸 リトラル』戯曲リーディング・本公演、『ペール・ギュント』『シャンハイムーン』……とまだ記憶に新しい世田谷パブリックシアター主催公演で音楽を担当し、時には舞台で演奏をし、舞台に欠かせない“音楽”を『The Silver Tassie 銀杯』でも手がける国広和毅。音楽を通して90年前の戯曲をどう舞台で立ち上げるか、思いを聞いてみた。

――多彩な舞台作品と向き合い、そしてさまざまな演出家と組み、音楽のプランナーとして楽曲を提供し、また自ら演奏をするなど、幅広くご活躍ですが、国広さんの音楽的なルーツというと。

「5歳でピアノを習い始め、10代でギターと作曲を始めました。三味線もその頃からでしょうか。高校時代は自宅録音でアルバムらしきものを作ったり、ロック編成のバンドでコンテストに出たり。大学時代、時間をかけて戯曲を読み解きながら作る演劇の音楽にやりがいを感じ、舞台音楽に目覚めました。演劇は照明や美術など構成要素が多くて面白そう、という単純な発想もありました。今でも音楽は演劇の一部だと大雑把に思っています。そう思おうとする時があるというか……」

――具体的にいいますと……

「音楽家が作曲する上で“いま/ここ”と向き合うことはとても大切だと思います。でもその文脈から逃れられず不自由を感じることもある。そんな時、例えば2018年の東京が舞台の架空の演劇作品の音楽を作るつもりになってみると、逃れられない文脈をまとうことを積極的に楽しめたりするんです。さらに実際の演劇の仕事では作品毎に様々な設定の“いま/ここ”と対峙させてもらえる。色々やりたがりの僕にはとても有り難いことです」

――今回の作品、90年前の戯曲で、第一次世界大戦さ中のアイルランドが舞台です。

「硬派でストレートな反戦戯曲だと思います。まずは当時のアイルランドの音楽や楽器について勉強します。世界の民族音楽好きの僕にとってはこれも有意義な作業ですが、そこから先が問題です。稽古場に溢れるヒントを逃さず形式にとらわれないプランを立てていきたいと思っています。音楽全体のコンセプトは演出家の言葉から、トーンやテンポ感は役者さんの演技から、スケール感は稽古場に組まれた仮の舞台セットからヒントを貰うことがよくあります。それから今回は歌が多い。戯曲で指定された曲も多いので、僕が全て作曲するわけではありませんがスコットランド民謡、グレゴリオ聖歌風の歌など20曲以上です。キャスティングに先立ち春にオーディションをした際、森さんからは歌を厳しくみて欲しいと要望がありました。僕は音程やリズム感などの歌唱力以外にも、表現力というのかな、シンガーとしてでなく、役柄としてどう声を出せるのかを集中して聴いていました。いわゆるソングではなく、言葉を“吟じる”ように歌う場面がありますので」

――劇中での数多い音楽はどういう役割を果たすとお考えですか。

「笑いがあって涙もある、賑やかな反戦悲喜劇と謳っていますが、筋は救いのない話なんですね。それがまさに戦争のリアルだと思います。そんな中、歌の存在だけがある種の救いになっている。登場人物達の思いの表れとしての歌に期待したい一方で旋律の持つ音楽的な美しさそのものも最大限表現できれば、と思っています」

くにひろ・かずき

作曲家、ボーカリスト、ギタリスト。「ダた」「Aujourd'hui il fait beau」「Théâtre MUIBO」メンバー。舞台／映像作品への楽曲提供や音楽監督としての参加も多い。近年の主な作品に、『炎 アンサンディ』『夢幻恋双紙 赤目の転生』『中橋公館』『きらめく星座』『ペール・ギュント』『アンチゴーヌ』『Shakespeare's R&J』『シャンハイムーン』『岸 リトラル』『ヘッダ・ガブラー』、NHKアニメ『白い本』などがある。『ffffffffffffffffffffffffffff-生まれて初めて出すフォルテ』『ゴッゴローリ伝説』では構成・演出。

［撮影：関口淳吉］

世田谷パブリックシアター　11月9日［金］〜25日［日］

『The Silver Tassie　銀杯』

作 ショーン・オケイシー　翻訳・訳詞 フジノサツコ　演出 森新太郎

出演 中山優馬　矢田悠祐　横田栄司　浦浜アリサ　安田聖愛　土屋佑壱
麻田キョウヤ　岩渕敏司　今村洋一　チョウ ヨンホ　駒井健介　天野勝仁
鈴木崇乃　吉田久美　野田久美子　石毛美帆　永石千尋　秋山みり
山本 亨　青山 勝　長野里美　三田和代

一般 S席（1・2階席）7,800円　A席（3階席）4,800円　※未就学児入場不可
S席7,600円　友 S席7,300円　U24 高校生以下 一般の半額　9月9日（日）一般発売

11月	9 金	10 土	11 日	12 月	13 火	14 水	15 木	16 金	17 土	18 日	19 月	20 火	21 水	22 木	23 祝金	24 土	25 日
13:00		●	●	休演日					●	■	休演日		●			●	●
14:00						◎		●				●			●		
18:30	●				●		●		●				●	●		●	

◎＝ポストトークあり　出演：森新太郎、中山優馬　ほか　※開催回のチケットをお持ちの方がご参加いただけます。
■＝視覚障害者のための舞台説明会（要事前申込・無料）

※発売日初日は窓口販売なし
※会員先行のみ1申込につき1公演4枚まで
お問合せ：劇場チケットセンター
03-5432-1515

せたがやアーツカード会員（前売のみ）　友 世田谷パブリックシアター友の会会員（前売のみ）　U24 18歳から24歳対象（要事前登録・前売のみ）　高校生以下（要年齢確認）

車いすスペース有り（定員有り、前日19時までに要予約 03-5432-1515）　託児有り（定員有り 2,000円、3日前の正午までに要予約 03-5432-1526）

向井潤吉 人物交流記

向井潤吉のエッセイを味わい、さまざまな作家とのふれあいをさぐる

向井潤吉は、1933年から世田谷区弦巻に居住した画家で、日本の草屋根の民家を題材とした作品が、多くの人々に親しまれています。
明治、大正、昭和、平成という時代を画家として生き、戦争を体験し、また幾筋もの新たな美術の潮流を身近に受けながら、創作を重ねてきた作家です。
この展覧会では、向井潤吉がしたためたエッセイの数々をご紹介しつつ、その人生で出会った作家の作品などもあわせてご紹介します。
さて、担当学芸員のZさんが、旧友Aさんに展覧会の魅力について語っています…。ちょっと聴いてみましょう。

A 向井潤吉さんといえば、日本の草屋根の民家を描いていた画家だね。

Z そう。太平洋戦争が終わった1945年から、約40年間にわたって、日本各地を巡り歩いて、草屋根の民家を描き続けた画家だよ。向井さんは、1901年に京都で生まれた。お父さんは、宮大工をしていて、お母さん方のお祖父さんも宮大工という家系だった。

A なるほど。向井さんには、“ものづくり”の血が流れているんだね。そういえば、向井さんの弟の良吉さんは、彫刻家だったね。

Z よくご存知! 世田谷美術館の前庭にも、大きな作品があるよ。兄弟そろって芸術家だ。しかも、潤吉さんも良吉さんも世田谷に住んでいた。とくに潤吉さんは、1933年から95年に亡くなるまで60年間、世田谷区弦巻にいたんだ。今の世田谷美術館分館・向井潤吉アトリエ館がある、あの場所だよ。

A ほお〜。ところで、向井潤吉さんは、どうして画家になったの?

Z 潤吉さんが少年の頃、日本でも油絵が徐々に広まっていた。京都には、ヨーロッパで勉強してきた浅井忠さんという画家がつくった関西美術院という学校があって、向井さんは油絵にとても興味をもって、15歳の時から、この学校で浅井さんの弟子たちに教えを受け始めたんだ。

A その頃、日本は日露戦争や第一次世界大戦でたいへんな時期。でも、明治から大正にかけて、日本でも民衆のなかに文化があふれはじめていたね。美術だけでなく、文学、音楽、演劇、建築や料理のことまで、どんどんヨーロッパなどから目新しい文化が流れこんできていた。

Z だから、そういう時代のなかで油絵の画家を目指すというのは、時代の先端をいっている、とってもナウいことだったんだよ。

A あのね。お言葉だけど、「ナウい」は、イマドキ使わないほうが……。まあ、それはともかく、今回の展覧会のタイトルには、人物交流記という言葉が添えられているけど、これはどんな意味?

Z 向井さんは、画家としてもさまざま仕事をしたけど、とても素敵なエッセイストでね。幼い日の想い出から始まって、民家を訪ね歩く道中での出来事が、とても洒落た言葉で綴られているわけ。なんと言えばいいのかな〜。エスプリが効いてるっていう感じかな。そういうエッセイを読んでいると、向井さんが交流をもった人たちの名前がたくさん登場する。今回の展覧会は、こうした向井さんのエッセイを読み解きながら、そこに登場する画家たちの作品も紹介しようという企画なんだ。もちろん、民家を題材とした代表作もたくさん展示しますよ。

A たとえば、どんなエッセイがあるの?

Z それは、展覧会の会場に足を運んでもらわないとね(笑)。とはいえ、ちょっと紹介すれば、まずは京都での想い出かな。幼い日の記憶や、関西美術院での出来事。それから青年に成長し、絵の勉強をするためにヨーロッパに渡って、ルーヴル美術館で古典名画の摸写をした日々のこと。太平洋戦争下での厳しい従軍のこと。そして民家と出会いなど、まさに向井さんの人生そのものが、エッセイのそれぞれに映し出されているんだよ。

A 向井さんが交流した作家とか、影響を受けた作家の作品も展示するの?

Z そうね。たとえば浅井忠、小出楢重、須田国太郎の作品もあるし、戦時中、インパール戦線で行動をともにした火野葦平さんとの想い出を描いた一作もあるんだ。全国の美術館や所蔵家から作品を借用して、向井さんの作品とともに展示するので、期待してほしいな。

『光』光文社　1946年1月号
「日本美」と題された一文。向井が民家に魅入られた瞬間がここにある。

A これまで、向井潤吉さんの展覧会をいろいろと観てきたけど、こういう企画は初めてかな?

Z そうだね。向井さんは1901年に生まれて、95年に亡くなっているから、その人生は、ほぼ20世紀という時代に重なり合っているわけ。元号でいえば、明治から平成をまたいだことになるね。20世紀って、日本だけでなく、世界がほんとうに変わっていったから、向井さんの画家としての人生や作品にも、時代の動向や、人々の心のありようが反映しているの。そういう意味で、ほかの作家の作品もあわせて観ることで、より各時代の雰囲気というか、においが味わえるのではないかと思っているよ。

A たしかに、美術に限らず、さまざまな表現には時代の気分が反映するね。

Z 皆さんがよく知っている民家を題材とした作品も、一見、静かな風景画に見えるけど、じつはしっかりと時代を反映している。向井さんは、戦時中に人間の暮らしを支えている民家が空襲で焼け落ちていくところを見ていたし、戦後、草屋根の民家がどんどんなくなっていくことを予見して、終戦の年の晩秋から、この果てしないとも思える、民家を描く旅を始めた。そして、その旅を40年間も続けることで、静かに、徐々に失われていった風景を記録するということになったわけだね。

A 高度経済成長の陰で進んでいった、もう一つの日本の表情を描き、記録したと言っていいね。

Z それと、どういう人と出会うかということも大事だし、その人たちに触発されて作品づくりが始まることもあるね。人間どうしの交流というのは、まさに人間にとってこの上なく重要なこと。だから、この展覧会では、向井さんがかかわった本の装丁の仕事や、挿絵の仕事も紹介しようと思っている。これは文学の人との関係という意味でね。

A 残念。そろそろ紙面がないようだけど……。

Z では、あとのことは展覧会の会場でお話ししましょう。時間をみつけて、ぜひいらしてくださいね。

［世田谷美術館 学芸部長　橋本善八］

開館時間　10時〜18時(最終入場は17時30分まで)
休館日　毎週月曜日(ただし、祝・休日の場合は開館し、翌平日休館)

世田谷美術館

向井潤吉《自画像》1919年　世田谷美術館蔵
18歳になる年の作品。青年画家の凛とした表情が印象的。

向井潤吉《ある司厨長の像》1949年　個人蔵
日本橋のたいめいけんを創業した茂出木心護氏がモデル。茂出木氏の葬儀で、向井は葬儀委員長をつとめた。

向井潤吉《遅れる春の丘より》1986年　世田谷美術館蔵
向井の代表作の一つ。白馬の山を望む、雄大な景色が印象的だ。

世田谷美術館　9月8日[土]〜11月4日[日]

向井潤吉 人物交流記

観覧料：一般 1,000(800)円、65歳以上、高校・大学生 800(600)円、
小・中学生 500(300)円　ほか
＊障害者割引あり
＊(　)内は20名以上の団体割引料金及びせたがやアーツカード割引料金
＊リピーター割引あり
会期中、本展有料チケットの半券のご提示で、2回目以降は団体割引料金になります。
展覧会に関連する企画、イベントなどを予定しています。
詳しくはホームページ、チラシなどをご覧ください。

美術 Schedule

《世田谷美術館》
■ 没後40年 濱田庄司展
大阪市立東洋陶磁美術館 堀尾幹雄コレクションを中心に ▶ **開催中〜 8月26日[日]**
■ ミュージアム コレクションⅡ
東京スケイプ Into the City ▶ **開催中〜 10月21日[日]**
《向井潤吉アトリエ館》
■ 向井潤吉 民家と街道 ▶ **開催中〜 8月26日[日]**
■ 向井潤吉 民家の旅 風土のかたちを求めて ▶ **9月8日[土]〜 2019.3月17日[日]**
《清川泰次記念ギャラリー》
■ 清川泰次　色と色のハーモニー ▶ **開催中〜 8月26日[日]**
■ 清川泰次　昭和の学生旅行 ▶ **9月8日[土]〜 2019.3月17日[日]**
《宮本三郎記念美術館》
■ 宮本三郎　親密な空間 ▶ **開催中〜 8月26日[日]**
■ 宮本三郎　装飾性の展開 ▶ **9月8日[土]〜 2019.3月17日[日]**
＊このほかにも様々なプログラムを行っています。ホームページ、チラシなどをご覧ください。

筒井康隆展

開館時間 10時～18時（展覧会入場及びミュージアムショップの営業は17時30分まで）
休館日 毎週月曜日（ただし、祝・休日の場合は開館し、翌平日休館）

世田谷文学館

http://www.setabun.or.jp/

『時をかける少女』『七瀬ふたたび』『虚人たち』『虚航船団』『旅のラゴス』『残像に口紅を』『文学部唯野教授』『モナドの領域』…、エンターテインメントと純文学の垣根を自由に越境、常に読者を驚かせ、魅了し続ける作家・筒井康隆さん。

筒井さんは1960年、江戸川乱歩が編集する雑誌「宝石」に掲載された「お助け」で作家デビューし、星新一・小松左京ともに「SF御三家」と呼ばれ人気を博します。その後はSFの枠に止まらない実験小説を次々と発表し、唯一無二の筒井康隆ワールドを築き上げてきました。

2018年秋、世田谷文学館では、今なお旺盛な創作活動を続ける、現代文学最高峰・筒井康隆の世界を紹介する初の展覧会を開催します。すべてにおいて規格外のこの作家の魅力を、初公開の原稿ほか多彩な資料と、独創的な展示空間でお伝えします。

開催に先駆けて、本展の見どころポイントを少しだけご紹介しましょう。

筒井康隆作品の数々。

本展の見どころ Ⅰ

筒井康隆の「凄み」とはこのことだ！

「小説を書こう、あるいは小説家になろうと決めた時から、その人の書くものには凄みが生じる筈である。小説を書くとは、もはや無頼の世界に踏み込むことであり、良識を拒否することでもある。」（『創作の極意と掟』2014年講談社）

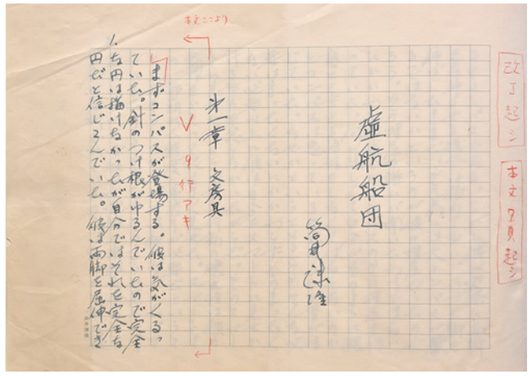
筒井康隆の凄みとは何か。この課題を読者はいつも自問自答せざるをえません。筒井康隆の小説に一般常識などの制限も、文学ジャンルの固定もなく、常に新しい試みが目の前に提示されるからです。筒井作品の凄みとはいかなるものかを、展示という立体空間にあらわしてみたいと考えたことから、本展の構想は始まりました。

星新一・小松左京らとともに日本にSFを根付かせた作品群、実験的な言葉・方法論を駆使したスラップスティック作品、哲学的理論を小説へと昇華させる実験作、時代を超えて愛されるジュブナイル…膨大かつ多ジャンルの作品が、すべてひとりの作家の頭脳から生み出されたことの衝撃とスケール感を、本展で体感していただきたいと考えています。

しかも本展は、通常の展覧会の法則や構成、配置にもまったくこだわりません。それこそが筒井康隆だからです。

我々読者が読み、感じたものすべてを本展に詰め込んだ先に、作家の「凄み」が現れてくることでしょう。

展示設計のトラフ建築設計事務所と打ち合わせ。
どんな空間が出現するか、乞うご期待！



『虚航船団』直筆原稿。文房具とイタチの宇宙戦争を描いた超虚構長篇小説！

本展の見どころ Ⅱ

「筒井康隆劇場」出現！

学生時代は、東映ニューフェイスに応募するほどに演劇にのめりこんだ筒井さん。20歳の時に劇団・青猫座に所属し数々の公演に出演し、新聞に「新劇界今年のホープ」として、仲谷昇、仲代達矢とともに紹介されました。しかしニューフェイス試験は面接で不合格となり、スター俳優としての歩みはいったん断たれます。しかし作家生活にはいってからも、筒井さんにとって演劇ジャンルは、常に欠かせないものでした。

日活ニューフェイスに応募した写真（1953年）

1982年、筒井さん自身が座長の「筒井康隆大一座」を立ち上げ、また自ら製作・原作・脚本・音楽・出演の『スタア』（監督・内藤誠）ほか、演劇・映像作品も数多く手掛けます。1999年には、演出家・蜷川幸雄のたっての希望で、チェーホフ作『かもめ』に作家のトリゴーリン役で出演して好評を博しました。

ニューフェイスにすんなり合格していれば、筒井さんの書く小説を私たちは手にすることができなかったでしょう。今となっては、当時の試験担当者の判断に、読者として感謝をしなければなりません。

現在は、文学・演劇の枠にこだわることなく、筒井さんは、あらゆる意味でステージの上で輝く「スタア」です。展示会場には、「筒井康隆劇場」が出現しますが、ここでは、『かもめ』、『スタア』ほか貴重な映像をご紹介し、俳優・筒井康隆の活躍を存分にご覧いただきます。

このほかにも、見どころ満載の「筒井康隆展」。文学の展覧会というイメージを覆す、筒井康隆だからこそ実現できる展覧会を準備しています。どうぞお見逃しなく。

［世田谷文学館 学芸部マネージャー 中垣理子］

profile

筒井康隆　つつい・やすたか

1934年大阪市生まれ。1960年SF同人誌「NULL」を発刊し、江戸川乱歩に認められて作家活動を開始する。81年『虚人たち』で泉鏡花賞、87年『夢の木坂分岐点』で谷崎潤一郎賞、89年「ヨッパ谷への降下」で川端康成文学賞、92年『朝のガスパール』で日本SF大賞、2010年菊池寛賞、17年『モナドの領域』で毎日芸術賞を受賞。02年に紫綬褒章を受章。主な作品に『時をかける少女』『家族八景』『大いなる助走』『虚航船団』『残像に口紅を』『文学部唯野教授』『聖痕』など多数。舞台・テレビ出演など幅広く活躍中。

2014年「日本SF展・SFの国」世田谷文学館記念朗読会に出演

筒井康隆 展

10月6日［土］～12月9日［日］

観覧料：一般 800（640）円／ 65歳以上、高校・大学生 600（480）円
／小・中学生 300（240）円
障害者手帳をお持ちの方 400（320）円
※（　）内は20名以上の団体割引料金及びせたがやアーツカード割引料金
※10月12日［金］は65歳以上無料

関連イベント

筒井康隆オークションイベント＆朗読会

11月、12月、2回開催予定。
多彩なゲストを迎えてのトークと、筒井さん愛蔵のSF蔵書ほか、秘蔵の品々を一挙販売するオークションイベントです。オークション終了後には、筒井さんの朗読会が開催されます！
詳細はHPをご覧ください。http://www.setabun.or.jp/
世田谷文学館「筒井康隆展」係
〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10　03-5374-9111（代表）

文学 Schedule

■ コレクション展後期 徳冨蘆花と烏山ゆかりの文学者たち（仮）
▶ **10月6日［土］～2019年3月31日［日］予定**
■ 次回企画展
第37回 世田谷の書展 ▶ **2019年1月8日［火］～14日［月・祝］**
ヒグチユウコ展 CIRCUS［サーカス］ ▶ **2019年1月19日［土］～3月31日［日］**

人はあそぶ―メキシコ民芸玩具展

生活工房

今年、外交関係樹立130周年を迎える日本とメキシコ合衆国。生活工房ギャラリーでは1970年代～現在に制作されたメキシコの民芸玩具を通し、その国の生活文化と精神を伝える展覧会を開催します。地球の反対側で生まれた玩具は、素朴でユーモアにあふれ、時にメキシコらしい粋な皮肉、死生観も込められた魅力的な作品ばかり。玩具をコレクションしている春日明夫氏に、その魅力についてご寄稿いただきました。

遊び心あふれるメキシコの民芸玩具

おもちゃ、トイ、フゲテ、どれも「玩具」という意味である。世界中には様々な種類の玩具がある。玩具とは、一般的に子どもの遊び道具であり、また教育のための道具にもなる。玩具は人の空想力、ユーモアや愛を表すものでもあり、人間がもつ独創的で素朴な想像力を表した貴重な文化財でもある。中国の著名な作家の魯迅は、「玩具はその国の文化水準を表す」と述べている。つまり、玩具はその国の文化の入り口であり、想像力を具現化したアートとしての産物とも言える。そして、何よりも玩具は「文化」や「平和」の象徴と言っても決して過言ではない。

私はそんな玩具文化や玩具のもつアート性に魅了されて、この40年間に研究の一環として世界中の玩具や遊具を蒐集してきた。これまで蒐集した玩具や遊具、それらの関係資料まで含めると数万点はくだらない。そして、蒐集の観点として最も重視していることは、手作りの良さが感じられて、かつ民族的、伝統的、文化的な要素があるものが中心であり、造形教育学的視点も加味している。つまり、それらが児童や生徒の鑑賞題材に成り得て、さらに子ども自身の手で作れる範囲のものである。したがって、どちらかと言えば大量生産されたプロダクトの産業的商品ではなく、手作り感覚のあるアーティスティックな素朴なものである。そして、ここ数年は特にメキシコの素朴な手作り玩具や民芸的なクラフトへの関心がより強まった。その理由は次の通りである。

メキシコの玩具には、①民族的、伝統的、文化的な要素が色濃くあり、人の手作り感が顕著に表れている。②人間的な遊び心（ユーモアも含む）や和みが感じられる。③伝統的、民族的なアート性やデザイン性などの造形美に秀でている。④押したり、引いたり、回したりするなど、動く仕掛けのある楽しいものが多い。⑤工業的な人工素材ではなく、自然素材の特性の良さを生かしている。⑥遊んだり、飾ったりできるインテリアトイ、トイオブジェの要素がある。⑦歴史的、社会的な背景を題材にした教育的、道徳的な要素がある。⑧国の独特な持ち味や個性（文化的な価値、歴史的な価値）がある。⑨造形教育学的視点から題材としてアプローチできる要素がある。

自動車 1970年代
ゴメスファミリー作

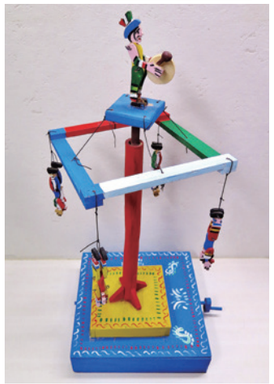
闘鶏 1980年代

闘牛 1990年代　グメルシンド作

カウボーイ 1960年代

ターザンとワニ 2017 年　グメルシンド作

メリーゴーランド 1960年代


ボラドール 1990年代　グメルシンド作

サーカス 2017年　グメルシンド作

マリンバ演奏者 2017年　グメルシンド作

メキシコには、このような視点や観点が見事に表れている玩具を制作し続けてきた職人がいた。その人物は、メキシコの手作り玩具の黄金期を知る最後の玩具職人と称されてきたドン・シンダ（愛称）である。彼の正式名は、グメルシンド・エスパーニャ・オリバース（1935～2018）。メキシコのグァナファト州サンタクルース・デ・フベンティーノ・ローサスに玩具工房を構え、メキシコの伝統的な手作り玩具のスタイルを守りながら、その技術や作風を継承してきた職人である。メキシコのテレビ・ドキュメンタリーの特集で放映されるほど知名度のある玩具職人であった。しかし、ドン・シンダは、残念ながら今年の2月18日に83歳で他界した。メキシコの手作り玩具の重要な職人が他界されたことは、メキシコにとっては実に大きな損失であるに違いない。そして彼は、日本ではまったく無名な人物であり、創作玩具の関係者や玩具の研究者からもほとんど彼の存在は知られていない。

本展では、生前のグメルシンド・エスパーニャ・オリバース氏の作品を中心に、それに関連する貴重なメキシコの手作り玩具を多数展示する。それらは、現在のハイテク時代にとっては似合わない、むしろローテクで素朴な手作り玩具の展示である。それらの玩具は、教育の有効性や知力獲得という理屈が優先される玩具の部類とはまるで次元が異なる玩具である。しかし、それらには人間味溢れる手作りの良さは勿論のこと、日々多忙な生活を過ごしている現代人がどこかに置き忘れてきてしまった「遊び心」、あるいは「ユーモア」という人間のみがもてる「豊かな感性」が見られる。すなわち、それらからは民族や文化という難しいハードルを超えた、「人類共通の人間性」のようなものが垣間見えるのである。本展を通じて「人間が創作する意味」、「人間の豊かな遊び心」、そして「人間の心の和み」など、人類の普遍性について、玩具からそれを感じ、気づき、そしてその意味を考えたりする、そんな出会いになれば幸いである。

profile

春日明夫　かすが・あきお

1953年東京生まれ。現在、東京造形大学造形学部デザイン学科教授、大学院造形研究科造形教育研究領域修士課程、博士後期課程教授、大学院研究科長。教育学修士、芸術学博士。専門分野は、チャイルドカルチャーデザイン、キッズサイズデザインなど子どもをめぐるデザインや造形活動を研究している。主な研究内容は、造形教育学的視点から玩具デザイン、玩具文化、造形教育の活動。研究の一環から世界の玩具や遊具や関係資料を収集し、玩具研究のための私的なミニギャラリーも設置している。

生活工房ギャラリー

人はあそぶ―メキシコ民芸玩具展

10月27日［土］～ 12月9日［日］ 9時～ 20時

会期中無休／入場無料

生活デザイン Schedule

- 鈴木まもる・絵本原画と鳥の巣コレクション展「鳥の巣がおしえてくれること」
  ▶ **開催中～ 8月26日［日］**
- クライム・エプリ・マウンテンvol.2「漆がつなぐ、アジアの山々」展
  ▶ **9月1日［土］～ 10月21日［日］**
- 世田谷アートフリマvol.30 ▶ **9月22日［土］・23日［日］**

※このほかにも様々なプログラムを行っています。ホームページ、チラシなどをご覧ください。

Let's Sing ゴスペル！ 2018コンサート with ワークショップクワイア

せたおんは(公財)せたがや文化財団 音楽事業部の愛称です　せたおん 音楽事業部

あなたもステージに立てる！ みんなで歌おうゴスペル！

―― 講師・シンガー のはらヒロコさんに聞く

2015年から始まった「Let's Sing ゴスペル！」、今年度も開催します。4回のワークショップに参加すれば、12月にはコンサートのステージに誰でも立てるという、“歌う喜び”を世田谷で体験できます。
ワークショップ講師、シンガーとしてこの「Let's Sing ゴスペル！」を支えてきた、のはらヒロコさんに、世田谷発のゴスペルについて、語っていただきました。

「４回練習するだけで歌えるのでしょうか？」

ゴスペル・ソングと言えば、黒人霊歌とジャズの要素を取り入れた賛美歌。大ヒットしたコメディ映画『天使にラブ・ソングを』で、日本でも知られるようになりました。

そのゴスペルを誰もが歌えるようになり、コンサートを開くというのが、今年で4回目を迎える「Let's Sing ゴスペル！コンサート with ワークショップクワイア」です。10月から隔週4回のワークショップで練習し、12月15日の世田谷区民会館でのコンサート当日は、カラフルなローブをまとい、観客の前で成果を発表します。

だけど、ジャズも賛美歌も知らない、そもそも歌もうまくない……それであのパワフルなゴスペルを人前で歌えるようになるのでしょうか？ 講師を務める、のはらヒロコさんが、その不安に答えてくれました。

「歌えます！ 自信を持って言えます！ これまで世田谷で３回開催してきましたが、みんなステージで歌ってきました。

曲選びも練習も、私たち講師が一生懸命、工夫し、考え、みなさんが楽しんで本番を迎えられるようにしています。譜面が読めなくてもだいじょうぶ。というよりは、そもそも、譜面は使いません。ゴスペルは耳で聴いて伝えられてきた音楽なので、子どもが言葉を覚えるように、まわりの人の声を聴きながら、歌い覚えていけばいいのです」

歌うよろこびを、みんなで分かちあう

ゴスペルの歌詞はシンプルで繰り返しが多く、美しいメロディがついています。もともと、町の人が日曜日に教会にきて歌っていた歌なので、むずかしくはありません。ノリのいいピアノの伴奏につられて、歌い手はすぐに上手になった気分になれるそうです。

公演では4クラスがそれぞれ２曲、さらに全員で2曲を歌います。音程がはずれても気にしない、歌詞を忘れたら口パクだってかまわないと、のはらさん。もっと大事なものがあるからです。

「正しい音程やハーモニーよりも、歌うって楽しい、うれしい。みんなで歌うと、もっと気持ちいいという体験をしてください。ふだん世田谷でそれぞれの生活をしているみなさんが、自分の声を持ち寄ってひとつになるって、素敵だと思いませんか。歌う楽しさを共有するよろこびを、感じてほしいと思います」

共有するのは歌い手だけではありません。コンサートでは、客席を巻き込んで一緒に歌う場面もあります。

昨年の、のはらクラスのステージ　©武藤奈緒美

「聴いているうちに、だんだん自分も声を出したくなるのがゴスペルです。参加してこそ、楽しさがわかります。会場全体が身体を揺らして声をあわせると、元気になって明日からもがんばるぞという気持ちになれますよ。

前回、客席で聴いていた人が、今年はステージで歌っていて、また次の人にゴスペルの魅力を伝えるという循環も起きています」

エネルギーに満ちたステージを体験

これまで「Let's Sing ゴスペル！」を監修・指導してきた亀渕友香さんが、昨年10月に亡くなられました。ビッグママと慕われ、日本のゴスペルを牽引し、広めてきた第一人者でした。ゴスペルを歌い始めて以降、のはらさんは亀渕さんと共に歩んできました。

「喜怒哀楽のはっきりしたチャーミングな人でした。たくさんのことを教えてもらいましたが、ひとつ挙げると、『自分の好きなことは、自分を助けるわよ』というお言葉です。生きていれば、つらいとき、悲しいときがある。でも好きなことがあれば、慰められ、支えてくれる。さらに人に出会い、つながり、広がっていくという意味です」

自分を助ける……ゴスペルはまさしくそのようなもの。神様への感謝や願い、祈りを捧げるゴスペルは、美しく希望ある言葉が並んでいます。

「言霊というように、良い言葉を口にすると、心が晴れたり、満たされたりします。日常でちょっとつらいことがあっても、歌い終わったときには清々しくなっています」

身体の奥から声を出し、大人数が力をあわせて歌いあげるとき、自分を解放して素の顔を見せあうので、連帯感や親密さが生まれやすくなります。世田谷のワークショップでも、知らない人同士があっという間に仲良くなっていくそうです。

「今年は過去最大の200人の参加を目標にしていますから、すごいエネルギーが生まれるでしょう。ステージに立つ人たちにも、客席にも、声のシャワーがふりそそぎ、感動的な体験ができると思います。どうぞあなたも参加して、一緒にゴスペルを歌いましょう！」

［取材・文：北島章子］［撮影：関口淳吉］

profile

のはら ヒロコ

大学時代にブラジル音楽に傾倒。卒業後、亀渕友香&the voices of japanに加入し、メンバーとして各地コンサートに出演。Superfly、大塚愛、ラブサイケデリコなど様々なアーティストのレコーディングやバックコーラスを務める。2009年以降、世界中を旅する「ピースボート」に講師として招かれ、船上で、ゴスペルやハワイアンコーラスのワークショップを行っている。関東を中心にゴスペル講師を務め、近年は、ハワイアンステージでも歌うなど、ジャンルにとらわれない活動を展開中。

Vol.13 せたがやジュニアオーケストラ（SJO）通信

▲5月の出発式で

夏のSJOは、たくさんのイベントで大忙し＆大盛り上がり！

まず最初の夏イベントは7月31日［火］、台湾の高雄市交響楽団附設青少年交響楽団との交流コンサートです。前日には一緒にお昼を食べ、合同練習を行いました。お互いの言語が違うので、最初はぎこちない様子だった団員たち。しかし一緒に音を合わせていくうちに、「音楽は世界共通語」であることを実感したようです。

また、8月には夏季合宿を行い、9月30日［日］にはオータムコンサートを開催します。気が抜けませんが、昨年に引き続きお世話になる指揮者 阿部未来先生の優しいご指導で子どもたちはめきめき成長中！ SJOの表現する音ひとつひとつが、お客様の心の奥まで届きますように。これからも精一杯練習していきます！

Let's Sing ゴスペル！ 2018　ワークショップ参加者募集

募集

世田谷区民会館での発表を目的とした、ゴスペルのワークショップを実施します。今年度より世界的ゴスペルグループ The Glory Gospel Singersのフィリス・マッコイ・ジョベルトを監修に迎え、またゴスペルを積極的に学びたい方に向けたアドバンスコースも新設。よりパワーアップした世田谷のゴスペルを通じ、歌う喜びを発信してみませんか。

応募期間　8月25日［土］～9月25日［火］
ワークショップ　①～④のいずれかのクラスに参加
▶楽しく歌おう！ ベーシックコース
① 火曜・夜　② 木曜・夜　③ 土曜・午前
▶歌う力をみがく！ アドバンスコース〈ゴスペル経験者〉④ 土曜・午後

スケジュール
▶10～12月　各クラスのワークショップにて4回練習
▶12月9日［日］　The Glory Gospel Singers フィリス・マッコイ・ジョベルトの特別ワークショップ
▶12月14日［金］　ワークショップ&リハーサル
▶12月15日［土］　世田谷区民会館にて公演
参加費　9,000円（予定）　※別途衣装レンタル代がかかります

終演後、みんな笑顔で♪
©武藤奈緒美

募集詳細は8月上旬頃にせたおんホームページまたはチラシをご覧ください

COMMUNITY PROGRAM
コミュニティプログラム

世田谷文学館

本と食の蚤の市 セタブンマーケット2018 開催しました

文学との新たな出会いをつくり、地域の人々が集い交流する広場

「林芙美子 貧乏コンチクショウ」展開催中の6月2日、セタブンマーケットが開かれました。第4回目となる今回は、古書や雑誌、林芙美子ゆかりの地・尾道の物産などを扱う10店舗が出店。展覧会メインビジュアルのイラストレーターによる似顔絵でのパスポート作成や、子どもたちに大人気の工作ワークショップもあり、朝から親子連れなどで賑わいました。また、館の外では、地元町会主催の「烏山下町まつり」も開催されました。
会場では、様々な年代の方々が、古書を手に取ったり、お菓子を買い求めたりとそれぞれに楽しむ姿が見られました。地域の人々が集い、行き交う広場としてのセタブンマーケット。その魅力をご紹介します。

いつもは静かな時間が流れる1階ロビーが、大賑わい。ふだんから来ている文学館ファンも、イベントを知って初めて訪れた方も、思い思いの楽しみを見つけています。

手先を使う作業に、子どもたちは夢中です！ 大人も挑戦して、自分の世界を作りあげました。

どんぐりや松ぼっくり、木の枝など、自然の素材を組み合わせてオブジェを作るワークショップ「ネイチャーコラージュ」。尾瀬自然ガイドでもある講師の須藤正男さんは、野山の風を文学館に運んできてくれました。

去年も作りました。今年のは、よりバージョンアップ！

箕輪麻紀子さんが、その場で描いたイラストでその人だけのパスポートを作ります。本人、写真の中の人、憧れの人、ペットでも。一瞬を閉じ込めた記念の1枚です。

貧しさ、苦しさをコンチクショウと乗り越え、恋をし、旅をする。時代を超えて若き女性に訴える、ひたむきな林芙美子の人生。展覧会メインビジュアルのイラストは箕輪麻紀子さん。デザインは三木俊一さん

古書や古道具などを扱う6店によって、ノスタルジックな世界が展開。一点ものが並んでいるので、ゆっくりと見て、手にとって、自分だけの一冊、一品を心ゆくまで選びます。

古本には、新刊書とは違う魅力がありますね。

手に入れた古本は『師範教育修身教科書』など。「ニュースで話題の『教育勅語』が載っています。昔、私も暗記させられました」。

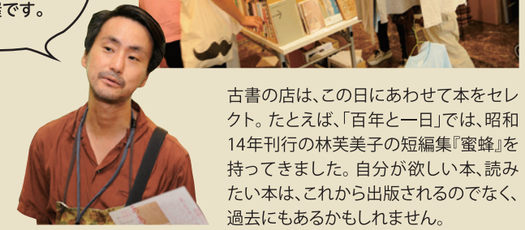
吉祥寺で15年のフランス菓子店です。

一息つきたいときは、コーヒーやスイーツの店へどうぞ！「ベアポンド エスプレッソ」も「パティスリー A.Kラボ」も、本格派に支持される味です。お店の人も、いつもと違う環境と、新しいお客さまとの出会いに、わくわくする１日でした。

北沢から来た、サードウェーブ珈琲の店です。

生もみじまんじゅう完売ありがとうございます。

林芙美子の詩が織り込まれた「コンチクショウ手帖」



本好きの思いを、次の人に手渡すのが古本屋です。

古書の店は、この日にあわせて本をセレクト。たとえば、「百年と一日」では、昭和14年刊行の林芙美子の短編集『蜜蜂』を持ってきました。自分が欲しい本、読みたい本は、これから出版されるのでなく、過去にもあるかもしれません。

広島県尾道市は、林芙美子が小学生から女学生までを過ごした町。その広島からご当地グルメが到着しました。手羽先、生もみじまんじゅう、尾道ラーメンなど、珍しい商品が並びました。

館外南側道路では烏山下町会主催「下町まつり」が開かれました。ゆるキャラ「からぴょん」も登場！

［取材・文：北島章子］［撮影：松谷靖之］

シアタートラム

KAAT神奈川芸術劇場×世田谷パブリックシアター

『バリータック』

評・川添史子 ［演劇ライター］

2018年4月14日～5月6日
KAAT神奈川芸術劇場＜大スタジオ＞
2018年5月12日～6月3日
シアタートラム

作：エンダ・ウォルシュ
翻訳：小宮山智津子
演出：白井 晃
出演：草彅 剛　松尾 諭　小林勝也　ほか

広い部屋で、日常的な動きを繰り返す男二人。彼らはどんな関係で、何をしているのか……この春上演された『バリータック』は劇中に散りばめられたさまざまな謎を、俳優たちが舞台上で生きるエネルギーによって燃やすような作品だった。言葉の断片や語られる風景がこちらの人生の“いつか”と呼応し、ふと泣きたくなる気分になる不思議な感触。自由な解釈の余白をわたされたような最終景を眺めたあとは、温もりとわずかな孤独が胸に残る。

登場人物は男1（草彅剛）、2（松尾諭）、3（小林勝也）。舞台上にはベッド、キッチン、シャワー、古い洋服ダンス。男1と2は目覚まし時計の音で目覚め、コーンフレークを食べ、80′sのレコードを聞いたりと、ここで生活しているようだ。大きな壁にあるネオンサインが点灯すると、二人は「バリータック」という村の話を夢中で語り始める。この繰り返しの日々を破ったのが、爆音とともに壁の向こうから登場した男3。「死が、ひとつ必要なんだ」と告げる男の言動から、どうやらこの物語は、生と死を語っているのだと分かってくる。

演出は、これまでも海外の同時代作家を手掛けてきた白井晃。アイルランドの作家エンダ・ウォルシュの戯曲が日本で紹介されたのはこれが初めてだ。世田谷パブリックシアターとKAAT神奈川芸術劇場の共同制作として約2カ月にわたる連続上演という画期的な試みでもあり、公共劇場としてのチャレンジが込められた企画でもある。同作が東京千穐楽を目前にした6月1日には、両劇場の芸術監督である野村萬斎と白井が登壇してのポストトークも開催された。ウォルシュと同じアイルランドの作家ベケットの『ゴドーを待ちながら』との共通項、日々変化する演出など興味深い話題が飛び出し、様々な解釈について語り合った。

［撮影：細野晋司］

［撮影：細野晋司］

両芸術監督によるポストトーク（左：野村萬斎 右：白井晃）

俳優たちの演技も忘れがたい。瞬間瞬間に思いが生まれるような感受性豊かな草彅、コミカルさにどこか淋しさと優しさがにじむ松尾のコンビは、激しく動きながら大量の台詞をこなし、エネルギッシュ。彼らのイノセントで熱の高い演技によって、目の前の出来事全てが「生きることそのもの」に見えた。男3を演じた小林は、台詞一つひとつに人生の実感を響かせ、圧倒的な存在感。繊細な演出によって三人が記号にならずに脈打つ人物として立ち上がり、どこかシュールな状況が、現実感ある世界として迫ってきた。ウォルシュの台詞は時に、この世の美しさや愛しさや儚さを紡ぐ一篇の詩のようである。

最後、男1は「12秒間」を歩き、壁の向こうへ消えていく。カウントダウンのような時間、〈ひとつの死〉を観ているこちら側も〈体感〉するような、震える感覚が身体に焼き付いた。

世田谷パブリックシアター

―狂言劇場 特別版―

能『鷹姫』・狂言『楢山節考』

評・山口宏子 ［朝日新聞記者］

2018年６月23・24・30日・7月1日
世田谷パブリックシアター

Aプログラム：狂言『呼声』：野村萬斎 ほか
狂言『楢山節考』：野村万作 野村萬斎／石田幸雄 ほか万作の会
Bプログラム：舞囃子『三番叟』：野村裕基 ほか
舞囃子『山姥』：観世喜正 ほか
能『鷹姫』：大槻文蔵 野村萬斎／片山九郎右衛門（6/30・7/1） 大槻裕一（6/23）

広がる空間 ドラマ性際立つ

野村萬斎は、2004年に始めた「狂言劇場」で、世田谷パブリックシアターの劇場空間と機構を生かして、狂言を現代の舞台芸術としてとらえ直す試みを続けている。古典劇の新たな魅力を引き出し、表現の可能性を広げてきたシリーズだ。その特別版である今回は、ともに＜生と死＞＜人と自然＞を主題とする新作狂言『楢山節考』と新作能『鷹姫』を中心に据えたAB二つのプログラムを3回ずつ交互に上演する野心的な構成だった。

劇場内に特設する能舞台は、正方形の舞台が客席に張り出し、両脇と正面奥の三方に橋がかりが伸びる特別な形。さらに主舞台の奥で演じることもできる。

天井が高く、奥行きが深いこの劇場では、能舞台の周囲に大きな空間が広がる。それをいかした演出や演技によって、狂言の持つドラマ性が膨らみ、際立ってくる。いずれも野村万作がシテを務めた舞台だが、例えば『川上』の最後の場面では、夫婦が手を取り合って舞台奥へ去り、闇にとける後ろ姿から深い情愛が立ち上った。『木六駄』では、牛を追って山道を行く太郎冠者の頭上に、厚い雲と、降りしきる雪の密度が見えた。緻密な芸が、広い劇場で拡大されて、その細部までくっきりと伝わった、ということだろう。

今回万作が主演した『楢山節考』も、能楽堂での上演とは異なる趣があった。

うば捨て伝説を踏まえたこの作品の主人公は、進んで山へ入ろうとする老女おりん。柔らかな表情の面をかけた万作は、一言のせりふも話さず、細やかなしぐさだけで、運命を静かに、かつ決然と受け止めるおりんを描きだす。

息子に背負われて山に登ったおりんが手前の舞台に一人残る。舞台の奥には、とぼとぼと帰る息子の姿がある。暗い谷が、二人の、死と生の世界を隔てている。おりんを包み込む清らかで大きな自然が目に浮かび、澄み切った心と、命が静かに溶けてゆくのが分かる。

『鷹姫』は、絶海の孤島にある「不老不死の泉」を巡る物語。人間の欲望が凝り固まったような「岩」たち（地謡）がごろごろと転がる荒涼とした地に、水が湧くのを待ち続ける老人、水を求めてやってきた若き王子、そして泉を守る鷹姫が現れる。大槻文蔵の老人からは、その身の内に気が遠くなるほどの歳月が凝縮しているような密度の高さと強靭さが伝わる。ただ一人、面を着けずに登場する萬斎の王子は、命永らえることを望む人間の生々しさを体現した。

鷹姫はダブルキャスト。大槻裕一は姫の超然とした清純さを醸しだし、片山九郎右衛門は袂を翻すだけで舞台の空気を一変させ、人ならぬ者の圧倒的な力を示した。舞台奥の橋がかりを急傾斜にして、斜面を駆け上がることで、鷹姫が飛び去る姿を表現したのも、「狂言劇場」ならではの鮮やかな演出だった。

Bプロでは舞囃子『三番叟』も。18歳の野村裕基が、沸き立つ生命の躍動を初々しく見せた。

『鷹姫』野村萬斎

『鷹姫』（6/23） 左：大槻文蔵 右：大槻裕一

『楢山節考』野村万作

［撮影：政川慎治］

PICK-UP ピックアップ

世田谷パブリックシアター

劇場から、地域へ暮らす人たちへ劇を運ぶ 世田谷パブリックシアター@ホーム公演

『チャチャチャのチャーリー ～さようなら涙くん～』

脚本・演出：ノゾエ征爾
出演：山本光洋　たにぐちいくこ
井本洋平　田中馨　ノゾエ征爾

劇場へなかなか足を運べないかたがたに、気軽に演劇を楽しんでもらおうと、2010年からはじまった「あっとホーム公演」。9年目を迎えた今年は、新作『チャチャチャのチャーリー　～さようなら涙くん～』を、区内の高齢者施設と障害者施設14か所で上演しました。

物語の舞台は、海の向こうの架空の国「ポンピン王国」。なんとその国の人たちは、キューピー魔女によってゼンマイ仕掛けにされていて、ゼンマイを巻き続けないと止まってしまうのでした！たまたま、海で荒波にのまれてその国に流れ着いたあやつり人形チャーリーと鼻デカ弟は、彼らを助けるため、魔女が住む森へと向かいます…！

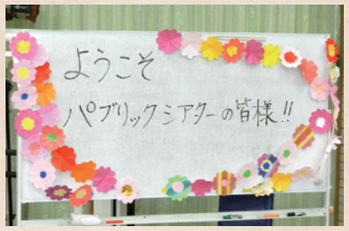
上演時間は35分。そのなかに、冒険あり笑いあり涙あり。さらに、観ている人たちが劇に参加できるようなしかけを盛り込みました。あとで施設の職員さんからは、「一緒に手をつないだり、身体を動かしたり、みなさんが一体感を持って楽しまれていた」「朝から、どんな演目？何をするの？とワクワクされていた」「役者さんのイキイキした演技に引き込まれ、表情がとても明るくなっていた」「歌が苦手な人が一緒に歌っていた」「“観劇を楽しむ”ことは正直、難しいのではと思っていたが、みなさん楽しまれている様子で驚いた」など、うれしい感想をいただきました。

この劇の最後の場面で鼻デカ弟は、この王国に残ってみんなのネジを巻く手伝いをすることを決め、「涙くんさよなら」を歌いながらチャーリーと別れます。その役を演じ、6年間あっとホーム公演で熱演してきてくれた俳優・井本洋平さんも、これが卒業公演でした。公演が終わり、職員さんがマイクをもって観たかたがたに感想をたずねると、井本さんの新たな船出にもらい泣きしたり、「がんばってね」と声をかけるかたも。いつにも増して目がしらが熱くなる公演でした。

［文：あっとホーム公演 制作 小宮山智津子］

公演風景

公演パンフより　イラスト＝菅野博子



公演の最後には会場全員で合唱しました

＊THEATRE

日中平和友好条約締結40周年記念公演 『風をおこした男―田漢伝』

10月6日［土］14時
7日［日］14時
世田谷パブリックシアター
◎10月6日はポストトークあり

現代的な演出でドラマチックに描き出す中国文化に多大な功績を遺した田漢の半生。

台本・演出 田沁鑫
出 金世佳　ほか

一般 S席（1階）5,000円
A席（2階）4,000円
B席（3階）3,000円
友 S席 4,800円　友 S席 4,500円
U24 高校生以下 S席 2,500円、A席 2,000円、B席 1,500円
8月5日［日］一般発売
※未就学児入場不可

『MANSAI ◉ 解体新書 その弐拾八』

10月10日［水］19時 世田谷パブリックシアター

野村萬斎　落合陽一

毎回多彩なゲストを招き芸術表現の本質に迫る芸術監督企画の第28弾。

企画・出 野村萬斎
ゲスト 落合陽一（メディアアーティスト、博士（学際情報学）、筑波大学学長補佐/デジタルネイチャー推進戦略研究基盤代表・准教授）

一般 4,000円　友 3,800円　友 3,500円
U24 高校生以下 2,000円　8月26日［日］一般発売
※未就学児入場不可
※発売初日は窓口販売はなし　※会員先行のみ1申込につき4枚まで

日本・スウェーデン外交関係樹立150周年 世田谷アートタウン2018関連企画 サーカス・シルクール『LIMITS/リミッツ』

10月19日［金］19時・20日［土］14時・21日［日］14時
世田谷パブリックシアター

撮影：Mattias Edwall

構成・演出 ティルダ・ビョルフォス
音楽 サムエル・アンダーション　出 サーカス・シルクール

一般 大人 4,000円　U24 子ども（4歳～高校生）2,000円
友 大人 3,000円　子ども（4歳～高校生）1,500円
※3歳以下は保護者の膝上のみ無料 ※未就学児は保護者の同伴が必要です

若手団体の登竜門的存在！劇場が期待を寄せる新しい才能を紹介 シアタートラム ネクスト・ジェネレーション vol.11 らまのだ『青いプロペラ』

11月29日［木］～12月2日［日］　シアタートラム

11月	29 木	30 金	12/1 土	2 日
13:00			●	
14:00		●		●
17:00			●	
19:30	●	●		

作 南出謙吾　演出 森田あや
出 富川一人（はえぎわ）　田中里衣　林田航平　斉藤麻衣子　福永マリカ　今泉舞　ほか

一般 3,500円　友 3,200円　友 3,000円
U24 高校生以下 1,750円　9月30日［日］一般発売
※未就学児入場不可

＊MUSIC

宮川彬良のせたがや音楽研究所 #10 ～これが俺のノスタルジー～

9月15日［土］17時 世田谷区民会館

合唱曲に、どこか“ノスタルジー（郷愁）”を感じたことはありませんか。合唱の楽しさってなに？ アキラ所長が感じるノスタルジーについて、歌声とともに楽しみましょう！

宮川彬良 ©PACO

出 宮川彬良（作曲家・舞台音楽家）、保坂展人（世田谷区長）、ダイナマイトしゃかりきサ～カス（3人組ボーカルエンターテイメントグループ）
ことのみ児童合唱団、世田谷ジュニア合唱団
ひばり児童合唱団、せたがや音楽研究所合唱団

一般 3,000円　友 2,800円
小・中学生1,000円<シリーズ10回記念特別料金、当日要証明書提示>
※未就学児入場不可

室内楽シリーズ　モルゴーア・クァルテット

10月8日［月・祝］15時　成城ホール

モルゴーア・クァルテット

古典派音楽からプログレッシブ・ロックまで演奏する、異色の実力派弦楽四重奏団。多くのファンから常に注目を集めている彼らが、渾身のプログラムで目を見張るような熱演をくりひろげます！

出 〈モルゴーア・クァルテット〉荒井英治（第1ヴァイオリン）、戸澤哲夫（第2ヴァイオリン）、小野富士（ヴィオラ）、藤森亮一（チェロ）
曲 モーツァルト：弦楽四重奏曲変ロ長調K.458「狩」
池辺晋一郎：ストラータⅫ（2017）　ラヴェル：弦楽四重奏曲ヘ長調
荒井英治編曲のプログレッシブ・ロック～ジェネシス：ザ・シネマショウ
アフターグロウ

一般 3,500円　友 3,000円　※未就学児入場不可

午後の音楽会 カルボナーレ！ 変幻自在のクラリネット

10月25日［木］15時　シアタートラム

平日午後の公演シリーズ。今年は驚異の超絶技巧イタリア人クラリネット奏者と、タンゴやジャズもこなす個性派ピアニスト黒田亜樹の共演。思いっきり楽しめる華麗で多彩なコンサートです！

アレッサンドロ・カルボナーレ　黒田亜樹

出 アレッサンドロ・カルボナーレ（クラリネット）黒田亜樹（ピアノ）
曲 プーランク：クラリネットとピアノのためのソナタ
ガーシュウィン：ガーシュウィン!!
アントニオ・パスクッリ：蜂
フランク・ザッパ／A.チェンナ編：FZ フォー・アレックス ほか

一般 3,000円　友 2,800円　※未就学児入場不可

チケットの購入方法

世田谷パブリックシアターチケットセンター　世田谷パブリックシアター／シアタートラムと音楽事業部の公演チケットを取り扱っています

電話予約 03-5432-1515（10時～19時 年末年始は除く）
窓口 キャロットタワー5階（10時～19時 年末年始は除く）
オンライン（要事前登録・登録料無料）（年中無休・24時間対応）
PC・スマホ → https://setagaya-pt.jp/
携帯 → https://setagaya-pt.jp/m/

チケット料金はすべて税込
せたがやアーツカード会員（前売のみ）詳しくは 裏面
友 世田谷パブリックシアター友の会会員（前売のみ）詳しくは 裏面
U24 18歳から24歳対象（要事前登録・前売のみ）
高校生以下 購入時もしくは当日要年齢確認
車椅子スペース（定員有り、前日19時までにチケットセンターで要予約）
託児サービス（定員有り、2,000円、3日前の正午までに要予約 03-5432-1526）
生後6ヶ月以上9歳未満。障害のあるお子様についてはご相談ください

SETAGAYA ARTS PRESS
せたがやアーツプレス
2018年7月31日発行〈Vol.14〉
編集・発行：公益財団法人せたがや文化財団

友の会ご案内

《友の会》会員募集中 メンバーには盛りだくさんの特典！

■ 世田谷パブリックシアター友の会
SePT倶楽部

特典
- チケット先行予約・チケット割引
- 会報誌《SePT倶楽部》を毎月送付
- 劇場内ロビーカフェ無料ドリンク券プレゼント
- 企画イベントへのご招待＆ご優待

お問合せ
世田谷パブリックシアター友の会事務局
03-5432-1524
https://setagaya-pt.jp/tickets/howtobuy/club.html

■ 世田谷美術館友の会
FRIENDS OF SETAGAYA ART MUSEUM

特典
- 世田谷美術館・分館の観覧料が、有効期間内何度でも無料
- 実技講座・鑑賞会・美術館巡りなどへの参加
- 会報《世田谷美術館友の会だより》を年3回送付
- 提携美術館の入館割引
- 館内ミュージアムショップの割引

お問合せ 世田谷美術館友の会事務局
03-3416-0607
https://setabi-tomonokai.jp/

■ 世田谷文学館友の会
Setagaya Literary Museum Friendship Club

特典
- 友の会独自の講座・文学散歩への参加
- 友の会会報、おしらせ、文学館ニュース、展覧会の案内を送付

お問合せ 世田谷文学館友の会事務局
03-5374-9111
http://setabuntomo.net/

［各館友の会共通の特典／レストラン・カフェの割引］
世田谷美術館・分館、世田谷文学館観覧料優遇／オークラレストランスカイキャロット（キャロットタワー26F）／レストラン・ル・ジャルダン、SeTaBi Café（世田谷美術館内）

せたがやアーツカード

"世田谷区民限定"区民のみなさまのアート体験を応援する《せたがやアーツカード》▶

15歳以上の区民ならどなたでも登録できます。せたがや文化財団の各施設で割引料金などお得な特典をご用意。入会金・年会費は無料です。

特典
- **●世田谷パブリックシアター／音楽事業部**
  ▶ チケット先行発売・会員割引（一部を除く・前売のみ）
- **●世田谷美術館・分館／世田谷文学館** ▶ 観覧料割引（一部を除く）
- **●生活工房** ▶ 講座受講料割引（一部を除く）
- **●メールマガジン毎月配信**（ご希望の方のみ）

世田谷美術館／向井潤吉アトリエ館／清川泰次記念ギャラリー／宮本三郎記念美術館／世田谷文学館の窓口でも受付。ファックスや郵送でも受け付けています。
お申込みの際は、ご本人の住所が確認できる書類（運転免許証、各種健康保険証、住民票）をご用意ください。
詳しくは、http://www.setagaya-bunka.jp/artscard/

お問合せ・申込み受付：せたがやアーツカード事務局 キャロットタワー5階 **03-5432-1548**（10時～19時）年末年始を除く **今すぐお申し込みを！**

せたがやのアートをみなさまの手で支えていただくために

寄付のお願い
文化・芸術の創造には、すぐれたアーティストの活躍はもちろんですが、それを支える有能なスタッフ、創造活動にふさわしい環境の施設など、ソフトとハードの両面で多大なエネルギーと資金が必要です。より身近に文化・芸術を支え、親しんでいただきたく、みなさまのご支援・ご協力をお願いいたします。

［寄付のお申込みについて］
おいくらからでもご寄付いただけますが、目安として2,000円からとさせていただきます。お申込みの際はお手数ですが、電話またはメールにてご連絡ください。

公益財団法人せたがや文化財団事務局
03-5432-1501
jimukyoku@setagaya-ac.net

当財団へのご寄付は税法上の優遇措置を受けることができます

個人によるご寄付の場合
確定申告を行うことで、寄付総額から2,000円を差し引いた金額が所得から控除されます。

法人によるご寄付の場合
「一般損金算入限度額」と「特別損金算入限度額」を上限として損金算入することが可能です。

個人住民税
都道府県・区市町村が各々の条例で指定した寄付金が個人住民税の寄付金控除の対象となります。ただし、各区市町村によって取り扱いが異なりますので、詳しくは、お住まいの区市町村にご確認ください。

施設情報

世田谷文化生活情報センター
〒154-0004 世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー
03-5432-1500（代）

生活工房
03-5432-1543 http://www.setagaya-ldc.net/

世田谷パブリックシアター／シアタートラム
03-5432-1526 https://setagaya-pt.jp/

音楽事業部
03-5432-1535
http://www.setagayamusic-pd.com/

世田谷文学館
〒157-0062 世田谷区南烏山1-10-10
03-5374-9111（代）
http://www.setabun.or.jp/

世田谷美術館
〒157-0075 世田谷区砧公園1-2
03-3415-6011（代）
https://www.setagayaartmuseum.or.jp/

世田谷美術館分館
清川泰次記念ギャラリー
〒157-0066 世田谷区成城2-22-17
03-3416-1202
http://www.kiyokawataiji-annex.jp/

世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館
〒154-0016 世田谷区弦巻2-5-1
03-5450-9581
http://www.mukaijunkichi-annex.jp/

世田谷美術館分館
宮本三郎記念美術館
〒158-0083 世田谷区奥沢5-38-13
03-5483-3836
http://www.miyamotosaburo-annex.jp/

Setagaya Arts Navigation
"今日、何やってる?"
せたがやアーツナビ 検索
http://www.setagaya-bunka.jp/
Setagaya Arts Navigation せたがやアーツナビ

公益財団法人 せたがや文化財団
〒154-0004 東京都世田谷区太子堂 4-1-1
キャロットタワー5F
03-5432-1501 03-5432-1559
http://www.setagaya-bunka.jp/

表紙 ：貫地谷しほり 小野寺修二 小林聡美
［撮影：久家靖秀］
デザイン：飯岡るみ
編集協力：有限会社 壘
＊掲載した情報は2018年7月現在の情報です。
やむを得ない事情などで開催予定、内容などが変更になることがあります。
＊本誌に掲載の記事・写真の無断掲載を禁じます。
編集・発行：公益財団法人せたがや文化財団
© Setagaya Arts Foundation. All rights reserved.

印刷：株式会社テンプリント